

動物の勇気

— 動物に利他的なヒーローはいるのか？

神戸大学大学院国際文化学研究所 准教授

山本真也 (やまもと しんや)

Profile—山本真也

2009年、京都大学大学院理学研究科生物科学専攻博士後期課程修了。博士（理学）。京都大学霊長類研究所特定助教などを経て、2013年より現職。専門は比較認知科学。著書は『社会のなかの共存』（分担執筆、岩波書店）など。



チンパンジーやボノボの利他・協力行動を野外と実験室で研究してきた。今回、「動物の勇気」というお題で執筆のお話をいただいたとき少しとまどったが、「勇気＋利他＝ヒーロー」だと捉え直し、少々強引ながら私の研究テーマに結びつけることにした。動物に利他的なヒーローはいるのかというテーマで書かせていただくことにする。

ために「ヒーロー」をグーグルで画像検索してみると、一番にウルトラマンが出てきた。正義の味方ウルトラマン。地球の平和を守るため、命を賭して悪者に立ち向かう。人々はこのようなウルトラマンを称賛し、あこがれる。ウルトラマンのような存在は動物界に存在するのだろうか。

動物の利他

まず、ヒト以外の動物も利他的に振る舞うのだろうか。この問いに対しては、イエスと答えてまず間違いない。母親が自分の子どもを守る行動は幅広い動物種で見られる。哺乳類や鳥類の親は子どもに乳あるいは食べ物を与えるし、子どもが捕食者に狙われたときには身を挺して守ろうとすることもある。地上に巣を作る鳥では、傷を負って飛べないかのような動作をして捕食者の注意を引き、巣の卵やひなから遠ざけようとするところが知られている。

血縁関係にない個体への利他行動となると、実証例は減ってしまうが、それでも多くの種で報告されている。私が研究しているボノボやチンパンジーは、仲間と食べ物を分け合って食べる。自分の取り分が減るにもかかわらず、仲間が取っていくのを許す。コンゴ民主共和国のワンパ村で野生のボノボを観察していると、現地名でボリンゴという大きな果物が頻りに分配されていた（写真1）。順位の低いメスが、高いメスから少しずつ何回ももらっていく。メスは年頃になると生まれた集団を離れて別の集団に入っていくので、基本的に大人のメス同士には血縁関係がない。それでも、順位の高いメスは抵抗するでも怒るでもな

く、相手が取っていくのを寛容に受け入れていた。

実験室からの実証研究も近年盛んだ。私自身、京都大学霊長類研究所のチンパンジーを対象に実験室で少しいじわるな実験を試してみた。チンパンジー2人に隣り合った部屋に入ってもらう。一方には手の届かないところに好物のジュース容器を置き、もう一方にはステッキを渡した。すると、ステッキを持っていたチンパンジーは、相手にステッキをちゃんと手渡してあげた（写真2）。さらには、相手の必要としている道具を理解して手助けしていることもわかった。ステッキあるいはストローを必要とする相手の状況に応じて、7つの道具の中から適切な道具を選



写真1 ボリンゴという大きな果実を食べるメスのボノボ



写真2 要求に応じてステッキを渡すチンパンジー

んで相手に手渡ししていた。

このように、ボノボやチンパンジーは血のつながりのない相手にも利他的に振る舞う。しかし同時に、ヒトと異なる点も見つかった。食物分配の例でも道具渡しの際でも、自発的な利他行動というのがほとんどみられない。慣例に従って「食物分配」と呼んでいるが、所有者が自ら分けて配るということはまず起こらない。あくまで相手が取っていくのを許しているだけだ。道具を差し出す場合でも同様で、相手から要求されない限り道具を渡さない。相手が必要とする道具をちゃんと選んで渡していたので、相手の状況は見て理解できていたはずだ。それにもかかわらず、自発的には手助けしない。

動物にヒーローはいるか？

このような利他行動に「ヒーロー」を感じるかという点、少なくとも私は否定的である。まずなにより、自発性の欠如が挙げられる。そして、利他行動のコストが小さい。つまり、これらの行動には「勇気」を感じさせる要素が欠けている。自らを危険にさらして相手を利するような行動は、母子間以外ではほとんどみられない。

しかし、ないわけではない。ライオンに襲われた仲間を他のバッファローが助けるといった場面が、よくニュースや動物番組で映し出される。世界で初めて手話を使ったチンパンジーとして有名なワシヨーにも英雄的な逸話がある。同じ集団に暮らすメスのチンパンジーが、放飼場を取り囲む堀に張られた水の中に落ちてしまった。その悲鳴を聞きつけるやいなや、ワシヨーは電気柵を越えて泥の中を水際に駆け寄り、水の中でおぼれかけているメスを救出した。チンパンジーは水を非常に怖

がり、もちろん泳ぐことはできない。ワシヨーの行動は非常に勇気ある行動として取り上げられた。

このような行動は、ヒト以外の動物にも共感がみられることを示唆している。他者の情動が自動的に自己の心の状態に反映される共感。相手が苦しんでいたり悲しんでいたりすると、自分も同じように感じてしまい、放っておけなくなる。これはもともと母子の間で有効に働いたと考えられている。子どもの要求や危険を感じ取り、いち早く対応するのに、この共感の能力は役に立っただろう。社会性の強い動物では、この共感する範囲が自分の子どもだけでなく、日々密接にかかわりあう他の仲間にも広がった可能性がある。共感による利他行動では、頭で考える前に心が反応して行動へと移されることがある。そのため、自分にとって非常にコストやリスクが大きい状況でも英雄的な行動が引き出されるのだらう。

ヒーローの進化

では、このような「ヒーロー」的な行動がヒト以外では数少ない事例にとどまっているのはなぜだろうか？ ひとつには、共感の能力に、ヒトとヒト以外の動物で隔たりがあることが考えられる。他者の立場にたって物事を考える視点取得の能力にヒトは長けている。これがヒトの利他行動を促進させている可能性がある。

もうひとつ、利他行動を評価する社会システムについてここでは考えてみたい。ヒトは他者の行動を評価し、それを別の他者と共有することで評判を形成する。評判のよい人は、助けてあげた相手からだけでなく、第三者から報いられることもある。このような評判を介した間接互惠システムの存在が、ヒトの利他行動、ひいては協

力社会を支えている。ヒト以外ではどうだろうか。動物たちが利他的な個体を「ヒーロー」とみなしているかという点、疑問が残る。チンパンジーやフサオマキザルが利他的な他者と利己的な他者を見分けているという報告があるにはあるが、それによって相手への振る舞いを変えたり、さらに別の仲間と評判を共有したりといったことは今のところヒト以外では知られていない。社会規範の進化については今後の研究の発展が期待されるが、評判を介した間接互惠システムがヒト社会の特徴であるという指摘は多い。このことが「ヒーロー」を生み出す土壌となっているのではないだろうか。

もちろん、他者からの評価を目的とした利他行動は「勇気ある行動」とは呼べないだろう。しかし、評判を介した間接互惠のある社会とない社会では、ヒーローが生まれる基盤に大きな違いがあるだろう。ウルトラマンは、称賛を得るために敵と戦っているわけではない。しかし、子どもたちの称賛がなければ、そもそもウルトラマンがこの世に生み出されること自体なかっただろう。勇気ある行動で他人を助け、そして周りから称賛される「ヒーロー」は、間接互惠による協力社会を築き上げてきたヒトに特徴的な存在といえるのかもしれない。